

公益財団法人日米医学医療交流財団 アメリカ短期看護研修助成

研修報告書 (2019年度 助成者)

作成日 2019年11月26日

氏名 (フリガナ)	青島友香 (アオシマ ユカリ)
研修地	アメリカ・オレゴン州ポートランド市
研修期間	2019年10月27日 (日) ~ 11月2日 (土)
所属機関名 身分	聖隷浜松病院 スタッフ

JC 認定されている海外の病院の看護実践を学び、自施設に活かすこと。入院期間が短い海外の退院支援状況を学び、産後の患者へのフォローの方法や産後鬱等の評価方法を知ること。まわりから良い評価をされても、素直に受け止められず、自分の事を大切にできていない自身の傾向を見直すため研修参加した。

5泊7日間、アメリカ・オレゴン州ポートランドに滞在し、現地の日本人ナースとの交流、JC 認定病院の取り組み、急性脳卒中のケア、アメリカのヘルスケアシステムと看護の展望、オレゴン州の尊厳死について、大学看護学部 of シミュレーションセンター、救急車配送システム、小児科病院、産科病棟、腫瘍外来、高圧酸素療法室、高齢者ケア施設の見学を通し、直接スタッフが大切にしていることを教えて貰うことができた。自由時間には、ポートランドの日の光を浴びたり、風の冷たさを肌で感じながら町並みを歩いたり、全く伝わらない英語でなんとか食事をすることで、本や人から聞く世界とは違う体験をすることができた。

見学させてもらった JC 認定取得病院で働くスタッフに共通していたことは、自分の事も相手の事も大切にしていることが態度で伝わることだった。宗教的な背景もあるのだと思うが、何かをしてもらったら、必ずお礼を言う。誰かが良いことをすれば、「Good Job」と必ず伝える。凄いことから些細なことまで、きちんと相手の目をみて、「あなたのこころすごくいいよ」と声をかけあっている姿を何度も眼にした。相手の良いことを伝えることは、ただ褒めているという単純なことではなくて、相手の事を認めてると伝えているのだと気がつかされた。アメリカ人が日本人に比べて、すごく自分に自信がある人が多いように思うのは、生まれつきの性格なんて単純なことではなくて、日々お互いに相手の事をちゃんと言葉で認め合っている結果なのだろうと思った。そういう文化が根付いているからこそ、尊厳死という考え方がオレゴン州では尊重されるのだとも思った。研修先の産科病棟で、助産師である事を告げると、その場にいた助産師たちが私を呼んで写真を一緒に撮ろうと言ってくれた。躊躇なく肩に手を回してくれて、言葉は通じなくても、同じ助産師であると相手が認識してくれたことを感じる事ができたし、その写真は私の宝物だ。相手の事を認めること、それをちゃんとわかりやすく態度で示すこと。それがうまくできないから、自分たちは有効な意見交換を職種問わずすることを難しく感じる場面が多々あるのではないかと思った。まずは互いに Good Job と伝えること。自分たちの施設でも、職種を問わず早速取り入れたいし、必ず定着させたいと思った。

病棟見学した中で、素晴らしい取り組みだと感じたのは大きなホワイトボードに病棟として何に取り組んで、どんな結果が出ているのかが、患者様にもスタッフにも、わかりやすく掲示してあったことだ。研究のポスターのような難しくかきこまった掲示物ではなく、スタッフの手書きで、データが貼り付けられていて、日々どんな事に問題を感じて、それに向き合っているかが分かりやすく掲示されていた。分かりやすく提示することで、スタッフが大切にしている医療や看護が患者様にも医療者にも共有されていると感じた。

今回ポートランドで出会った、ポートランディアン (ポートランドの女神) はポートランドの女性を象徴していて、"she flies with her own wings" というスローガンがあるのだと教えてもらった。ポートランディアンに出会ってから、自分で羽ばたくためにはどうしたら良いのかとずっと考えているが、まずは、私が一番苦手とする、自分の良いところを見つけて認めることから始めようと思う。今回の研修参加は海外の医療を肌で感じるだけでなく、自分を見つめる良い機会になった。研修参加に背中を押してくれた上司、ポートランドの皆様、トラベルパートナーズの皆様、日米医学医療交流財団の皆様、ありがとうございました。